

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 曆ままの上では晩夏ばんげである。
- 2 郷里きょうりの母から手紙がくる。
- 3 小説を朗読する。
- 4 国を治める。
- 5 新しい学説を唱える。

次の——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 こづかいをリヨヒにあてる。
- 2 本来のギョウムに専念する。
- 3 新しい勢力がタイトウする。
- 4 失敗して思わずシタを出す。
- 5 ビルをタてる。

い、それをまつすぐにするためになわを持つ手を不自然な高さにする
と、すぐに疲れて、同じテンポを保てなくなってしまう。

でも、きみのクラスでは、回し手のメンバーを選ぶことはできな
かった。

「二人は決まりだよね……。」

クラスの女子でいちばんいばっている万里ちゃんが、つまらなそう
に言った。「だって、なわとびできないんだもんねー、しょうがない
よねー。」と、ひらべったくねばついた声でつぶやいて、話し合いの輪
のいちばん外にいるきみを振り向いて、「跳べないでしょ、どうせ。」
と答えのわかつていることを——わかっているから、訊いた。

2 底意地の悪い子だ。四月に初めて同じクラスになったときから嫌
だった。向こうもそうなのだろう、なにをやっても、こつちがなにも
言わなくても、**B** 突つかかってくる。

きみは黙ってそっぽを向いた。後ろの席に立ってかかっていた新しい松
葉杖の置き方を直すふりをして、グリップをそっと握りしめた。

「じゃあ、万里ちゃん、あと一人は？」

堀田ちゃんが訊いた。「話し合い」ではなく「万里ちゃんが決める」
集まりになっている。堀田ちゃんのように万里ちゃんに媚びる子が
いるから、そうなってしまう。堀田ちゃんも嫌いだ。去年の誕生日には
家に招いた一人だった。でも、いまは嫌いだ。堀田ちゃんは、昨日が
わたしの誕生日だったってこと、覚えていただろうか……？

「由香ちゃんしかいないんじゃないですかあ？」と万里ちゃんは大
げさなため息をついた。みんなも「やだあ」と笑う。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、抜き
出して答える問題では、句読点等は一字として数えるこ
と。)

主人公の和泉恵美(「きみ」)は、雨の日に傘をさして下校していたが、友
だちが次々とむりやりに自分の傘に入ってきたので嫌になって、前を歩いて
いた由香ちゃんの傘に入れてもらおうとした。しかしそのとき勢いがつきま
ぎて車道に飛び出してしまい、交通事故に遭った。左脚が不自由になった恵
美は傘を奪った友だちを責め、悪口を言った。いつしか誰もお見舞いによつ
てこなくなり、退院する頃にはクラスのみんなを敵に回すようになっていた。

誕生日の翌日の学級会で、男女に分かれてなわとび大会の話し合い
をした。失敗せずに何人つづけて跳べるかをクラス対抗で競う、学期
末恒例の大会だ。五年生の一学期は、クラス替えして初めての大会と
いうことになる。

いい記録を出すには、跳び手のがんばりはもちろん、回し手の
A の合い方やなわを回すうまさも欠かせない。速すぎず遅すぎず
の一定のテンポでなわを回しながら、みんなが疲れてくると微妙に速
さをゆるめたり、跳び手ごとに好みのテンポに合わせたり……そうや
つて、うまく記録が伸びれば百回以上も、跳び手と違つて途中で休む
こともできずになわを回しつづけるのだ。

だから、どこのクラスも、回し手はスポーツの得意な子が担当して
いた。仲良しで**A** の合うコンビがいいし、できれば背丈も揃えた
ほうがいい。身長に差があると、なわを回してつくる輪が傾いてしま
う。

由香ちゃんは、きみと同じようにみんなの輪のいちばん外にいて、
きみとは逆に申し訳なさそうにうつむいた。ふだんは色白の顔を赤く
して、太った体をしょんぼりと縮める。でも、しかたない。きみが万
里ちゃんでも、由香ちゃんを回し手にする。運動が全然できない子が
跳び手になったら、順番が回ってきたところで、記録は途切れてしま
う。

「あーあ、ウチらのクラスつて、すつごい損してるよねー。もう絶
対に優勝できないよ。」

万里ちゃんが言った。**C** 堀田ちゃんが、「万里ちゃんが一人で
十回つづけて跳べれば優勝できるのね。」とご機嫌をとる。

「じゃ、そういうことで、回し手は決定でいいよね。」

真つ先に拍手をして「さんせい！」と言ったのも、堀田ちゃんだった。
「次は跳び手の順番決まーす。回し手のひとは関係ないから参加
しないでくださいーい。回し手同士で仲良く話し合ってくださいーい。」

みんなは困った顔で、小さく笑った。きみと目が合わないようにな
つむいてしまう子もいた。さすがに堀田ちゃんも今度は合いの手を入
れなかった。

きみはまたグリップを握りしめた。やつぱり、前の松葉杖よりずつ
と握りやすい。指先の方がきちんとグリップに伝わる。強く握る。そ
れが歯を食いしばる代わりになる。

立ち上がる。みんなから離れた席に座った。由香ちゃんもこつちを
見ていた。あいかわらず申し訳なさそうな顔で、わたしなんかとコン
ビになつてごめんなさい、と謝っているみたいだった。

おいでよ、と手で呼んだ。笑って迎えることはできなかったが、そつぽは向かなかつた。四月に由香ちゃんと同じクラスになったとき、ほんとうは、少しうれしかった。なぜかはわからない。事故に遭う前だつたらそんなことは思わなかつたはずだ、ということだけ、わかる。そもそも、なぜあの日、由香ちゃんの傘に入ろうとしたのだろう。いままでしゃべつたこともないのに、断られるかもしれない、とは考えなかつた。たとえ傘に入れてもらつてもなにを話せばいいのかわからなかつたのに、なんとかなる、と思つていた。

なにより——入院中、あれほど友だちを責め立てて、しまいには「傘持つて行けつて言つたからだよ」と事故をお母さんのせいにならなかつたきみなのに、由香ちゃんが悪いんだとは一度も思わなかつた。それがいまでも不思議だ。

きみの隣の席に座つた由香ちゃんは、まず最初に「失敗したらごめんね。」と、「もしも」の話ではなく、もう実際に失敗してしまつたみたいで顔で言つた。

「べつにいいよ、こんなの勝たなくてもいいし。」

きみはそつげなく言つた。事故を境に、そんなしゃべり方をするようになった。「歩けないからスネてるんだよね。」と、いつか万里ちゃんに聞こえよがしに言われたことがある。こいつ、全然わかつてない、とそつぽを向いて冷ややかに笑つてやつた。

「和泉さん」——由香ちゃんはきみを苗字で呼んで、「練習どうする？ 今日、晴れてるし、二人で特訓する？」とつづけた。考える間もなく

て、「みんな」は愛想笑いを浮かべない子には話しかけてこないんだな、と知つた。

しばらく沈黙がつづいたあと、やつと由香ちゃんは顔を上げて、遠慮がちに言つた。

「……和泉さんつて、昨日、誕生日だつた……よね？」

「なんで知つてんの？」

「クラス名簿に出てたから。」

「つて、四月につくつたやつ？」

「そう……みんなの誕生日、カレンダーに書いたから……で、昨日、和泉さんの誕生日なんだなあ、つて。」

「なんで？ なんでそんなのカレンダーに書いてんの？」

「……ごめん。」

「違つて、怒つてるんじゃないんで、なんで？」

由香ちゃんは顔を赤くして、そつでなくても細かい声をさらに小さくして、「病院のまね。」と言つた。きみが入院していただのと同じ、大学院院のことだつた。小学校に上がる前の由香ちゃんは、小児病棟にずつと入院していた。由香ちゃんのような幼稚園児から小学六年生まで、ほとんどが長期入院の子どもで、病院の中には小学校も特別に設けられていた。

「『お友だちの部屋』つて呼んでた部屋があつたの。黒板とか机とか本棚とかテレビがあつて、小学生の子はそこでも勉強するんだけど、ちつちやな子も具合のいいときには、自由に入つて遊べるの。」

そんな部屋があるなんて、きみは知らなかつた。整形外科の病棟と

「しない。」と答えると、またしよんぼりと、申し訳なきさうにうつむいてしまふ。

二人で話をしたことは、いままでもなかつた。由香ちゃんがクラスの誰かと話をしてるところも、ほとんど見たことがない。四月からずつと気になつていた。でも、話しかけるタイミングが見つからなかつた。事故に遭つたあの日は平気で駆けて行けたのに、いまはなにをしゃべればいいのか決めないといけない気がして、それが見つからないから話しかけられない。

由香ちゃんはどうつむいたまま、顔を上げない。

「だつて、どうせみんな練習するんじゃない。」——きみの口調はついでい言ひ訳めいてしまふ。

「でも……そのときにうまく回せないと、みんなに悪いし。」

「関係ないよ、そんなの。」

ちよつと腹が立つた。由香ちゃんが「みんな」を気づかうのが嫌だつた。

「みんな」は信じない。きみはいつも思う。「みんなと仲良く」なんて、そんなの嘘だ。傘に入れるのは一人、せいぜい二人。友だちだから、と無理して五人も傘に入れることはなかつた。あの五人の中で、すつごく仲良し、という子は一人もいなかった。こつちの肩が雨に濡れてもいいから、この子だつたら傘に入れてあげたい、入つてほしい……そんな子は、よく考えてみたら、友だちの中には誰もいなかった。

だから、もう「みんな」とはしゃべらない。「みんなの中の誰か」が話しかけても、愛想笑いは浮かべない。そう決めて、それを実行し

小児病棟は広い敷地の端と端だつたし、松葉杖の練習で中庭を散歩していたときにも、子ども入院患者の姿はめつたに見なかつた。中庭に出られないぐらい病気の重い子が多かつたつてことなのかなと、いま思つた。

「お友だちの部屋」には、看護師さんが手作りした大きなカレンダーが貼つてあつた。そこには入院中の子ども全員が誕生日が書き込まれていて、誰かの誕生日には、ベッドから出られる子はみんな「お友だちの部屋」に集まつてお誕生日会をする。

「看護師さんやお医者さんが人形劇してくれたり、手作りのプレゼントトくれたり、歌をうたつてくれたりするだけなんだけど、それがすつごく楽しみだつたの、みんな。カレンダーめくつて、あと何日、あと何日……つて。」

その頃のことを思い出したのか、由香ちゃんはいれしそつに、初めて笑つた。

きみは——正直、ちよつとあきれ、「そのまねしてんの？」と訊いた。

「うん……。」

「でも、全然違つてじゃん。べつにお誕生日会なんかしないし、一緒に入院とかしてたら、それはまあ、友だちっぽい感じになると思つけど……でも、全然違つてじゃん。」

由香ちゃんは、またしよんぼりとして、「ごめん……。」とつむきそうになつた。

「違つて違つて、怒つてないつて。」

あわてて言ったきみは、「でもわかるよ、なんとなく、その気持ち。」と笑って、なんで気をつかって慰めてるんだらうなあ、と今度は自分に向けて苦笑した。

由香ちゃんは気を取り直すように、ふう、と息をついて、きみに言った。

「和泉さん、誕生日おめでとう。」

家族以外からももらった唯一の「おめでとう」だった。

9 きみは思わずそっぽを向いて、二回深呼吸をして、言った。

「ちよつとだけ、特訓しようか。」

由香ちゃんが笑ったのが心配でわかった。たんぼの綿毛がふわつと舞い上がるような、まんまるでやわらかい笑顔だった。

「あとさあ……苗字で呼ばなくていいから。『さん』付けも嫌いだし。」

10 そう言ったあと、急に手持ちぶさたになって、松葉杖のグリップをつかんだ。ギュツと握りしめると、手のひらや指は痛くなったのに、

背中がくすぐったくてしかたなかった。

(重松清 『きみの友だち』による)

問一 Aに入る漢字一字を文章中から抜き出して答えなさい。

問二 B・Cに入ることばとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

B ア いそいそ イ いちいち
ウ たまたま エ ちまちま

C ア せっかく イ ますます
ウ まんまと エ すかさず

問三 線部6「聞こえよがしに」10「手持ちぶさた」の意味として

最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

6 聞こえよがしに

ア 言つて聞かせるように

イ わざと聞こえるように

ウ はっきり聞こえる大きな声で

エ なんとか相手に聞こえる声で

10 手持ちぶさた

ア どうしていいか分からない状態

イ なにも考えがうかばない状態

ウ 言ったのを後悔している状態

エ その場にいつらい状態

問四 線部1「きみのくできなかった」とありますが、この理由を五十字以内で説明しなさい。

問五 線部2「底意地の悪い子だ」とありますが、このように述べた理由を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人のできないことを覚えていて、ここぞというときにそれを言い立てて恵美をひどく傷つけたから。

イ 恵美がなわとびをとべないという分かりきつたことを友だちにたずねることで、恵美をひどく傷つけたから。

ウ 人のできないことについて冷やかしてばかりにするだけでなく、本当にそのことができないのか確かめたから。

エ 恵美がなわとびをとべないことは分かりきつていて言わなくてもいいことなのに、それをわざわざ確かめたから。

問六 線部3「グリップを握りしめた」とありますが、ここでの恵美を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いじわるな友だちに立ち向かっていこうと決意している。

イ 万里ちゃんに対して感じる寂しさを十分に味わっている。

ウ いじわるな友だちを見下して自分の優位を確認している。

エ 万里ちゃんに対する怒りの気持ちを抑えようとしている。

問七 線部4「申し訳なさそうにうつむいた」とありますが、これと対照的な恵美の動作を表した一文を文章中から抜き出し、その最初と最後の三字ずつで答えなさい。

問八 ——線部5「さすがにゝ入れなかった」とありますが、この理由を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 万里ちゃんがあからさまに恵美たちを仲間はずれにするようなことを言ったので、さすがにかわいそうに思っただけで調子を合わせるようなことを言う気にならなかったから。

イ 万里ちゃんがあからさまに恵美たちを仲間はずれにするようなことを言ったので、これ以上万里ちゃんに調子を合わせるとクラスの雰囲気が悪くなると思っただけから。

ウ 万里ちゃんはクラスのボスのような存在でありその発言は絶対であるが、足の不自由な恵美を傷つけるのはもうやめたいと思っただけから。

エ 万里ちゃんはクラスのボスのような存在でありその発言は絶対であるが、回し手をおしつけておきながら仲間はずれにするのはさすがにひどいと思っただけから。

問九 ——線部7「考えるゝ答えると」とありますが、この理由を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア なわとび大会で結果を残したいと思っただけで万里ちゃんたちの意向に沿うようなことをするのはもったいないと思っただけから。

イ みんなのためにがんばることに価値を認めておらず、クラス全員で参加する行事に協力する必要はないとふだんから思っただけから。

ウ クラスで目立たない由香ちゃんと一緒に回し手をすることは不本意であり、協力して回し手の腕を上げようとは思っただけから。

エ 自分たちに対する万里ちゃんたちの態度は間違っているから、こそこそ練習したりせずに堂々としていけばいいと思っただけから。

問十 ——線部8「でも」と笑って」とありますが、ここでの恵美の

気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 回し手の練習をしようという由香ちゃんの誘いを断ったり、友だちの誕生日をカレンダーに書くという行動に疑問を呈したりしながらも、そのことで由香ちゃんのことを傷つけないようにしたいと思っただけから。

イ 回し手の練習をしようという由香ちゃんの誘いを断ったり、クラス全員の誕生日を覚えるという行動をばかにしたりしながらも、由香ちゃんの素直な気持ちに心動かされている。

ウ 回し手の特訓をしたいという由香ちゃんの気持ちを無意味だと指摘したり、友だちの誕生日をカレンダーに書くという行動を幼稚だとしていたりしながらも、せっかく仲良くなった由香ちゃんとの関係を大切にしたいと思っただけから。

エ 回し手の特訓をしたいという由香ちゃんの気持ちを無意味だと指摘したり、友だちの誕生日が来る度にカレンダーで確認する行動を不思議に思ったりしながらも、素直な性格の由香ちゃんに好意をよせている。

問十一 ——線部9「きみはゝ言った」とありますが、ここでの恵美を

説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おめでとくと言われて素直に喜ぶことができずに一度目をそらしてしまっただけで、深呼吸をしている間にどう反応しようかと考えをめぐらしている。

イ おめでとくと言われてうれしい気持ちがあったものの、まだ由香ちゃんのことを友だちとして認めていないわけではなく、心を開くことをためらっている。

ウ おめでとくと突然に言われて素直にうれしさを表せなかったが、由香ちゃんの気持ちに沿った発言をすることでその気持ちを間接的に伝えようとしている。

エ 練習をしようという誘いを断つたのを申し訳なく思っただけで、自分から練習に誘うことで由香ちゃんのことを気にしている。

問十二 文中の……線部の表現について説明したものと最も適

切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「みんな」という表現は、かきかっこをつけることによって
恵美が本当はクラスのみんなを信じたいと思っていることを表
している。

イ 「……和泉さんって、昨日、誕生日だった……よね？」という
表現は、「……」によって由香ちゃんの素直で優しい性格を表
現している。

ウ 「たんぼの綿毛がふわっと舞い上がるような」という表現で
は、比喩を用いることによって人物のようすがイメージできる
ようになっていている。

エ 「背中がくすぐったくてしかたなかった」という表現では、身
体感覚を表す言葉を用いることによって以後の話の展開を暗示
している。

四

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、抜
き出して答える問題では、句読点等は一字として数えるこ
と。)

「和歌を作っておられるんですね。優雅ですね。」

と、時折声を掛けられることがあります。和歌じゃなくて短歌なんで
すが……と反論したくなるのをグッと押さえ、¹ そのたび私は曖昧にほ
ほえむことにしています。

和歌と短歌。どちらも **A** の三十一音から成る短い表現のかたち
です。確かに、両者に表面的な区別はありません。だから、和歌はい
いですね、と言われて、² **B** を立てて相手に訂正を求める必要は
ないと言つてよいのです。

一般に、明治三十年代を境にして、それ以前の作品を和歌と呼ん
でいます。従つて、和歌の時代は『万葉集』の頃から明治中期まで
千二百年以上も続いたことになりました。それに対して、短歌は明治
三十年代から現在まで、まだ百年と少しの歴史しかありません。

C、明治三十年代に和歌はどんなふうにして短歌へと変わった
のでしょうか。その経緯について簡単に解説してみましよう。

明治の中頃まで、和歌と言えば『古今和歌集』や『新古今和歌集』
の作品と直結した、完全に様式化された表現形態と見なされていまし
た。平安時代の貴族社会の美意識がそのまま明治にも残っていたわけ
です。

たとえば、満開の桜の花をうたおうとする場合でも、目の前の桜の

花をただ描写すればよい、というわけにはいきませんでした。「桜」
と聞いただけで、『古今和歌集』(九〇五年成立)の紀貫之の桜の歌や、

『新古今和歌集』(一二〇五年成立)の藤原定家の桜の歌をただちに思
い浮かべねばなりません。さらにそこに「源氏物語」などの王朝文学
の情緒も取り入れて……と、膨大な予備知識が要求されます。

それらをすべて下敷きにした上で、眼前の桜をうたわなければなり
ませんでした。**D** 和歌一首作るのにも本当に骨の折れることでし
た。こうなると、趣味や教養の範囲を超えて、もう学問の領域と言つ
た方がよいでしょう。

現に、当時は歌塾と呼ばれる一種の専門学校のような機関がありま
した。『たけくらべ』『にこりえ』などの小説で知られる女流作家樋口
一葉も、歌塾で和歌を学んでいた一人でした。歌塾「萩の舎」の優等
生であった一葉が遺した和歌を読んでみますと、

また更にあふべき夜半のあるものをなど死ぬばかりつらき別ぞ

(別恋)

などの作品があります。
歌の意味は「またお会いできる夜もあるでしょうに、このお別れは
なぜ死ぬほどつらく思われるのでしょうか。」

この歌をどう思いますか。恋する気持ちをしつとりとうたつてはい
ませんが、どうも型にはまりすぎた印象を受けませんか。様式をはみ出
さないように、という配慮ばかりが先立つて、いまひとつ **E** 気が
します。小説では複雑な女ごころをあれほど見事に書き表わした一葉

なのに、なぜ和歌に対しては自分の心情をさらけ出せなかったのか、
不思議なくらいです。

【中略】

歌塾では、たとえば「別恋」という題を塾生に与えて、彼らが王朝
和歌や物語文学の情感をいかに巧みに和歌に反映できるかを競わせた
のでした。そういう背景があったために、一葉に限らず、和歌の時代
にはこうした没個性的な作品が好しとされたのでした。

しかし、明治の文明開化が進み、近代化の波は詩歌の世界にも次第
に押し寄せてきます。そんな明治二十年代から三十年代にかけて、^{5*} 与
謝野鉄幹や正岡子規が和歌革新運動の旗を掲げて活動を始めます。

与謝野鉄幹は、明治二十九(一八九六)年刊行の詩歌集『東西南北』
の序文で「小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ(私の詩や歌は、す
なわち私のものです)と書き記しました。現代の私たちから見ると全
く当然の宣言なのですが、伝統と形式でがんじがらめになっていた当
時のことを考えると、これがいかに **F** 期的な決意であったか、わ
かつてもらえらると思います。

春の桜をうたい、秋の名月をうたい、若々しい恋をうたう。そうい
った場面場面でも、もう旧来の和歌の教養に縛られることなく、自分だ
けの率直な思いを表現することに全エネルギーをかけようとしたので
す。

正岡子規も同様に、新しい時代には発想の転換が必要である、と考
えた人物でした。子規の斬新なところは、これまでの和歌では高尚な
ものしかうたわれる対象にならなかったのに対して、身の回りのどん

なごさやかなものでもうたつてしまおう、と挑戦したことでした。

人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蠅殺すわれは

正岡子規『竹の里歌』

歌の意味は（人々が皆、箱根や伊香保へ遊びに行く日も、私は粗末な家に籠つて蠅を殺しています）。

蠅などという可愛気のない虫が出てきますし、しかもその蠅を「殺す」とうたつていられるのですから、美的表現とは程遠い歌です。

子規は三十六歳で亡くなっていますが、亡くなる前の数年間は脊椎カリエスのため寝たきりの生活を送っていました。病床の限られた空間だけが自分の宇宙だった子規には、蠅を叩き殺すことも日々の大切な日課だったのかもしれない。

絵空事の恋や花鳥風月をうたうよりも、蠅の歌の方がずっと自分らしい歌になっている。きつと子規は誇りを持って蠅の歌を作ったのだらうと思います。

病身とは言っても子規はとても社交的で、自分の家に短歌の仲間を集めて議論し合うことが大好きでした。そうした折に、招待状として出した葉書にこんな短歌を書いたことがあります。

十四日、才登スギヨリ、歌ヲヨミニ、ワタクシ内へ、オイデクダサ

よくわかる歌です。会話がそのまま短歌のしらべに乗っていて、言

葉の流れがとでもリズムミカルです。カタカナまじりで表記していることも、電報めいていて遊び心があります。

短歌では、決まった音数の中に言葉を当てはめなければなりません。このことは、一見制約があつて窮屈なようですが、逆に考えれば、定型がごく自然に耳ざわりのよい言葉のリズムを保証してくれることでもあります。これは大きな利点です。標語や商品の宣伝文など、覚えやすい短文は五音と七音の組み合わせで出来ていることが多いものです。日本語において、五音と七音の作り出すリズムは元々受け入れられやすいものなのです。

子規のはがき歌には、次のような一首もあります。

風呂敷ノ包ヲ解ケバ驚クマイカ土ノ鑄型ノ人ガ出タ出タ

歌の意味は（風呂敷包みを開けると、なんと驚いたじゃないか。土でできた人形が出てきた、出てきた）。

これは、美術学校に通う弟子から手作りの置物をもらったときの返事です。三句目の「驚クマイカ」は、本来五音になるべきところが七音になっています。

このように「A」の枠から言葉がはみ出すことを「字余り」と言います。逆に足りないときは「字足らず」となります。あまり大幅な字余り字足らずは短歌のリズムを壊してしましますが、二音くらいまでのプラスマイナスは許容されています。

この一首では驚きを如実に表わすためにあえて三句目を字余りにし

問一 Aに入る音数を漢数字五字で答えなさい。

問二 線部2が「ささいなことをとりあげてとがめて」という意味になるように、 Bに入る漢字かなまじり四字のことばを答えなさい。

問三 C・Dに入ることをばとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

A では イ ただし
ウ あるいは エ また
オ だから カ たとえば

問四 Eに入る「区切る」という意味の漢字一字を答えなさい。

*紀貫之 平安時代前期の歌人。

*藤原定家 鎌倉時代前期の歌人。一一六二～一二四一。

*王朝文学 平安時代の文学。

*王朝和歌 平安時代の和歌。

*没個性的 個性がないさま。

*与謝野鉄幹 詩人・歌人。一八七三～一九三五。

*正岡子規 俳人・歌人。一八六七～一九〇二。

*脊椎カリエス 脊椎に結核菌が感染して起こる、死亡率の高い病気。

*花鳥風月 自然界の美しい風物。

*如実 ありのまま。

問五

——線部1「そのたび〜しています」とありますが、ここに示されている筆者の考えを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の作ったものが短歌であることははっきりしているはずだが、和歌の方が歴史が長いために和歌だと認識されてしまうのは残念である。

イ 自分が作ったものが何であるかをきちんと認識してもらえないのは不本意だが、短歌を形式が同じ和歌と間違えることは仕方ないことだ。

ウ 和歌と短歌とを形式という観点から区別することはできず、両者の違いは歌の背後にある思想だけなので、区別できなくても構わない。

エ 和歌と短歌とを区別する必要があるのは専門家である歌人や学者だけであり、一般の人は短歌を和歌だと認識していても構わない。

問六

——線部3「和歌は〜変わったのでしようか」とありますが、この変化について比喩を用いて表した一文を抜き出し、その最初と最後の三字ずつで答えなさい。

問七

——線部4「学問の領域と言った方がよい」とありますが、この理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 和歌を作る前提としてそれまでの和歌や物語文学について非常に多くの知識を持つていることが要求されたから。

イ 上手に和歌をよむためには過去の和歌や物語文学について様々な解釈を研究し多様な作品を作る必要があったから。

ウ 和歌とは何かという問題について理解を深め、その考え方をふまえた作品を作らなければならなかったから。

エ 和歌や物語を研究して平安貴族の美意識を理解し、そうした人々の気持ちになつて和歌をよむことが求められたから。

問八

□ Eに入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 情景が浮かばない

イ 技量が足りていない

ウ 表現が工夫されていない

エ 実感がこもっていない

問九

——線部5「与謝野鉄幹や〜始めます」とありますが、与謝野鉄幹や正岡子規の考えを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いままでの和歌を超えるような美しさを生み出したり、和歌のよくない点を改めたりすることが新しい時代の短歌には必要だという考え。

イ 新しい時代の感性を表現するためには伝統的な形式にとつた和歌を作るのではなく、これまでにない新しい音数の短歌を作るべきだという考え。

ウ それまでよまれてきた和歌の情感に基づいてよむのではなく、自分自身がその時に感じたことや身近な素材を短歌にすることが大切だという考え。

エ 伝統を踏まえているかどうかによって和歌に優劣をつける発想を捨て、誰もが評価を気にせずに感じたままをよむことができるようにするべきだという考え。

問十

——線部6「きつと〜思います」とありますが、筆者の考える正岡子規の思いを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 和歌を作る高貴な人々に対し自分は蠅が表しているような庶民的な生き方をしていきたいという思い。

イ 蠅のような存在でも時には和歌でよむことのできるような美しい姿を見せることがあるのだという思い。

ウ 伝統的な和歌を尊ぶ古い考えを克服するためには、蠅のような奇抜な題材を歌にしていかなければならないという思い。

エ 蠅のような日常の物事こそ、病床に伏す自分にとってはよむにふさわしい題材なのだという思い。

問十一

——線部7「十四日〜オイデクダサレ」とありますが、この歌を筆者が引用した目的を説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 短歌にカタカナ表記を用いればそれが遊びで作った作品だと示せるということ述べるため。

イ 短歌は決まった音数を用いるだけで質の高い作品を作りあげることができるということを述べるため。

ウ 日常使われる普通の言葉でも短歌の音数を用いるとよいリズムをもつたものになるということ述べるため。

エ 日常使う標語や宣伝文などは短歌と同じようなリズムを用いたものが多く見られるということ述べるため。

問十二 — 線部8「短歌では、当てはめなければなりません」とあり

ますが、短歌の定型についての筆者の考えを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 定型がよいリズムを生んで短歌を整えているのと同時に、決まった音数が自由な発想を妨げている。

イ 定型がこちよいリズムを生み出しているのと同時に、短歌にほどよい制約を与えている。

ウ 定型が芸術性を確かなものにしており、同時に、短歌が堅苦しくなりすぎないようにしている。

エ 定型が整然とした美しい形式を生み出しているのと同時に、決められた字数が短歌を作りやすくしている。

問十三 — 線部9「驚クマイカ」とありますが、この表現のねらいを

述べた部分を文章中から十字以上十五字以内で抜き出し、その最初の五字で答えなさい。

問十四 本文の内容について説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア はじめに新しい時代との調和を図っていた和歌の限界を指摘し、

その後でその和歌の限界を超えるものとしての短歌の新しいさとそれを可能にした時代背景について説明している。

イ はじめに伝統に縛られていた和歌の表現について説明し、その後でそうした和歌に対する短歌の表現の新しいさや定型であることとの利点について例を挙げながら説明している。

ウ はじめに和歌について伝統的な美意識を重んじる傾向があることを述べ、その後で短歌の例をあげてその革新性を論じつつ今後の役割について意見を述べている。

エ はじめに和歌と短歌には似ている点があることを述べ、その後で両者の違いについて日常性という観点から説明したうえで結論として短歌の方が時代に合っていると述べている。

五

例にならって次の1〜5の二つの文の[A][B]に共通して当てはまる漢字一字をそれぞれ書きなさい。

(例)

[A] [B]
を経営する。

広く [B] [A]
について学ぶ。

答え A 会 B 社

1

[A] [B]
な生活を心がける。

音楽家の [B] [A]
がある。

2

この計画の [A] [B]
は難しい。

小さい頃からの夢を [B] [A]
のものにする。

3

[A] [B]
に従って判断する。

[B] [A]
を使って長さを測る。

4

新しい駅ができて [A] [B]
性が向上する。

新しい駅ができて [B] [A]
になる。

5

[A] [B]
を調節する。

[B] [A]
で育てる。

